第22回学術総会／パネルディスカッション 2

開業医・地域医療の検診の役割を考える

円滑ながん診療連携拠点病院における乳癌検診
および検診後のフォローアップ体制

聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科

志茂	新	大井	涼子	黒田	貴子	小島	聖子
永澤	慧	岩重	玲子	志茂	彩華	土屋	恭子
上島	知子	白	英	川本	久紀	津川	浩一郎

要旨：現在、乳癌検診はピンクリボン運動やメディアの影響もあり、検診の中でも普及しつつある分野ではあるが、実際カテゴリー3以上の要再検者の2次検診においては各病院が悲鳴を上げているのが現状である。精査や経過観察をしても乳癌が否定的なカテゴリー3以上の要再検者が数多くいて、がん診療連携拠点病院においては癌患者とともに癌ではない要再検患者を診ていかなければならず、乳腺外科の外来時間はどの病院でも長く、院内でも不評のもとになっているのが現状である。そこで当院は2009年に乳癌検診専門のプレストイメージングセンターを立ち上げ、1次検診のみならず、2次検診も大学病院と分けることや10年以上経過した乳癌術後の患者たちをプレストセンターでフォローすることで、大学病院の外来時間の短縮が可能になった。のみならず関連病院の検診システムを工夫することで、外来時間は短縮しつつも手術件数を全国3位になるまで増やすことを可能にした。今回は当院独自の検診システムおよび医局員が少なくとも手術件数を増加させるに至ったスタッフの勤務体制を報告する。

索引用語：乳癌検診、検診後フォローアップ、がん診療連携拠点病院

はじめに

乳癌検診はピンクリボン運動やメディアの影響もあり、検診の中でも普及しつつある分野ではある。しかし、実臨床においてカテゴリー3以上の要再検者の2次検診にて異常がなかったものの、マンモグラフィでの石灰化を示す患者や、超音波にてカテゴリー3以上を示す患者においては、その後一般検診に戻しても再度要検査になることが多い。そういった患者は過去の所見と比較しながらフォローする必要があるが、実際にはフォローする病院は少なく、日本全国で各病院が悲鳴を上げているのが現状である。当院のようながん診療連携拠点病院ではずっとフォローしていくことで外来患者数がどんどん蓄積していき、がん診療連携拠点病院においては癌患者とともに癌ではない要再検患者を診ていかなければならず、外来時間の延長の原因となっている。それだけではなく、似たようなケ

ースとして、術後10年目以降の乳癌患者に関しても、乳癌の既往がある患者たちはただでさえ乳癌の発生率が高いのに、一般検診では再度要検査になることが多く、フォローしていくことで外来患者数がどんどん蓄積していく。外来において、長年フォローしていた異常のない要再検患者や術後10年目以降の乳癌患者たちの外来フォローを終了し、一般検診に戻そうとする際に、患者自身から再度要検査になるようならフォローを続けてほしいと懇願されることがあり、そのやり取りでかなりの時間をとられることが多く、結局その時間が嫌なためフォローし続けてしまうことも多い。そのことも外来患者数がどんどん蓄積していき、外来時間の延長の原因となっている。

1. 乳腺外科外来の問題点

当院だけでなく、全国共通の乳腺外科外来の問題点として挙げられるのは、外来終了時間が遅いということである。その原因として大きく2つ挙げられる。それは、外来患者数が多いということとスタッフが少ないということである。

まず第一に外来患者数が多い理由としては、乳癌の罹患率は女性の中では第一位と頻度の高い疾患である

別冊請求先：〒216-8511 川崎市宮前区菅生2-16-1
聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科
志茂 新
e-mail address: arata-shimo@marianna-u.ac.jp

図1. 聖マリアンナ医科大学付属研究所プレスト&イメージング先端医療センター付属クリニック(プレストセンター)

ということである。その他には、検診を受けに来る患者が非常に多いということ。それ以外にも先程から述べているように、検診で要再検になって一般検診に戻せない患者がどんどん蓄積されていくことや、乳癌術後の10年目以降のフォローの患者も一般検診に戻せず、患者がどんどん蓄積されていくことも外来患者数が増えていく原因となっている。しかし、年々増加していくこれらの外来患者のほとんどは、病人ではなく健常人であるということが言えるだろう。乳腺外科の外来というのは、大部分が健常人にかなりの時間を割いているわけで、その改善ができれば、外来時間の改善が見込まれるのである。

続いて第二の乳腺外来の問題として、スタッフが少ないということを挙げたが、その理由としては、一般的には外科医不足が深刻であるということが挙げられる。外科医というのは労働条件も悪く、一人前になるまでの期間も長く、若い医師からは敬遠されがちな職業である。その中でも乳腺外科は女性医師が専攻することが多いのが特徴である。そのため、女性医師は結婚、出産を機会に休職、引退することが多く、休職を選んだ女性医師も子育てしながら働ける環境が整っていない職場も多いため、結局復職が困難だったり、労働条件の良い職場に変更せざるをえないことも数多くみられる。そのためスタッフの確保が困難で、結局外来時間の延長につながっていくのである。

2. プレスト&イメージング先端医療センター付属クリニック

1) 設立の経緯

そこで、わが聖マリアンナ医科大学は検診を専門にした「プレスト&イメージング先端医療センター付属

クリニック」(略称：プレストセンター)を2009年3月21日に設立した。乳癌の検診だけでなく、乳癌の外来治療を行う目的の施設として設立した。川崎市新百合ヶ丘の駅前徒歩5分の立地で、診療時間は午前10時から午後6時までとし、電話による完全予約制の体制をとっている(図1)。

わが「医科大学」と「プレストセンター」の関係性を説明しなければならない。まず本拠地である「医科大学」は、複数ある各最寄駅からそれぞれバスで平均約30分かかる、山の中腹に位置する大変立地条件の悪い土地に位置している。そのため集客動員数も悪く、なかなか他の病院との地域連携も困難な状況である。先程から述べているように、「プレストセンター」は駅前徒歩5分の立地条件の良い場所に位置しており、「医科大学」とはバスで約30分であるが、自家用車なら15分程度の距離である。そのため、患者のやりとりだけでなく、スタッフの行き来も簡単で、大学からすれば、言うなれば駅前の出張所のような存在である(図2)。

2) クリニックの利点

「プレストセンター」の特徴として、大きく4つ挙げられる。①大学と電子カルテが共有である、②外来が完全電話予約制であること、③外来のみの施設である、④初診の問診は看護師が行うこと、以上の4つである。

それぞれの特徴を述べると、①「医科大学」とのカルテの共有により、患者のやり取りがスムーズであるということである。いちいち紹介状が必要ないため、紹介状作成の時間も省けることが利点である。

②の外来が完全電話予約制であることでの利点は、

図2. プレストセンターと大学の関係

「医科大学」では電話予約ができないためいちいち来院しないといけないシステムであるが、「プレストセンター」は完全予約制にしたため、術後10年目以降の乳癌患者や、カテゴリー3以上の検診異常者も数多く受け入れが可能になった。これまで「医科大学」では1年後の検査予約を入れても直前に用事が入りキャンセルになって検査枠が無駄になったり、予約を取り直すために来院した際に、予約変更だけなのに何時間も待たされたりしていた。そのために外来で検診結果を説明するだけでも、いろいろ不満を言われ、謝罪を繰り返す時間ばかりが余計にかかる外来環境であった。「プレストセンター」では患者自身で予約を入れてもらっている。そのため術後10年目以降の乳癌患者や、カテゴリー3以上の検診異常者も自分で電話して予約をとってもらうため、検査のキャンセルが格段に少なくなっているだけでなく、あまり検診に熱心でない患者は自然と自らフェードアウトしていくため、外来で文句を言われ時間をとられることもなくなった。その他、「医科大学」では来院した患者すべてをその日に診ないといけなかったが、完全予約制にすることで来院患者数のコントロールもしやすく、外来待ち時間も減少している。急なスタッフの欠員状況になった場合も対応が可能となった。

③の「プレストセンター」は外来のみの施設であり、利点としては子育てしながらの勤務可能な環境であることである。「プレストセンター」は入院設備がなく、診療時間が10～18時までのため、夜中に呼び出されることはなく、妊娠、出産で一時的に産休を取っていた女性医師も復帰しやすい環境となっている。入院が必

要な場合は近所の「医科大学」で対応可能である。乳腺外科という分野は緊急対応する場面が少ないのに、入院設備がある病院ではやはり救急対応をしないわけにはいかない。当直業務をしていてもほとんど緊急に対応しなければいけない場面はなく、ただ院内にいて業務のほとんどは電話対応するだけである。それならば、乳腺外科という分野においては、入院施設はなるべく一カ所にして、その周りで外来施設を増やす方が効率的である。

④初診の問診は看護師が行うことの利点は、初診外来の医師の問診時間を大幅に短縮でき、より多くの初診患者の受入れが可能となっている。それ以外にも、問診を看護師が行うことで看護師自身の診療に対してのモチベーションが上がり、治療にも積極的に参加して意見を述べる姿が認められており、円滑なチーム医療が可能となっていることである。

3) 設立による影響

「プレストセンター」を設立したことで、「医科大学」にも影響が出てきている。

まず、①「医科大学」での外来時間の短縮が挙げられる。「プレストセンター」の設立により、今まで「医科大学」でフォローしていた術後10年目以降の乳癌患者や、カテゴリー3以上の検診異常者を「プレストセンター」で効率よくフォローすることで、「医科大学」での外来時間が明らかに短縮できている。具体的には「医科大学」での平均外来終了時間が21時であったのが、18時まで短縮できている。

続いて、②スタッフ活用の効率化の技術を得ること

図3. 聖マリアンナ医科大学の関連施設

図4. 当院の初発乳癌手術件数の推移

ができたことである。初診や検診フォローの専門外来を作ることで、より多くの症例を決められた時間の中でフォローするだけでなく、勤務時間の計画を立てやすいことにより、出産後の女性医師のフォローも受けやすい環境ができた。女性医師の中には週に1回の半日のみの勤務の者もいるが、それだけでも数多くの症例を診ることができ、スタッフ全体の負担を減らすことができる。それ以外にも勤務時間の計画を立てやすいことにより、「医科大学」と「プレストセンター」をスタッフが往来することで、手術の空き時間でも外来を担当することができる環境を作ることができた。

それ以外にも、③初診外来を強化することで「医科大学」での手術件数の増加が認められた。前述したスタッフ活用の効率化により「プレストセンター」での初診や検診フォローの専門外来を強化するだけでなく、その他の関連施設においてもそのノウハウを生かして初診や検診フォローの外来を強化することで、「医

科大学」での手術件数を増加することが可能となり、乳癌の手術件数においては全国でも上位になるほど増加できた。「医科大学」の関連施設は、小田急線新百合ヶ丘駅前の「プレストセンター」だけでなく、東急東横線およびJR南武線が通る武蔵小杉駅前の「聖マリアンナ医科大学東横病院」、小田急線およびJR南武線が通る登戸駅前の「川崎市立多摩病院」、当科OBの経営する東急田園都市線が通るたまプラーザ駅前の「プレスティアたまプラーザ」の4施設がある(図3)。4施設ともにすべて駅前の交通のアクセスの良い立地条件であり、駅前で初診や検診フォローの専門外来を行い、入院、手術が必要な場合は「医科大学」に移動することで、「医科大学」の立地条件の悪さを補うことが可能となり、手術件数の増加につながった(図4)。それだけでなく「医科大学」の関連4施設においては、スタッフを曜日により移動させることで初診や検診フォローの外来を強化し、多くの診察をしている

ことも手術件数の増加の一因となっている。

おわりに

最後にまとめると、当院「医科大学」は「ブレストセンター」を設立することで、乳腺外科外来で問題となっていた術後10年目以降の乳癌患者や、カテゴリー3以上の検診異常者も数多く受入れが可能になり、初診や検診フォローの専門外来といった役割分担をすることで、外来時間の短縮がはかれた。それだけでなく、出産後の女性医師の働きやすい環境を作り、スタッフ活用の効率化を図ることで関連施設との連携も円滑に

なり、立地条件の悪さを補うことが可能となり、手術件数の増加が認められた。

これらのことは全国の乳腺外科外来の状況改善の参考になるものと思い、報告した。

謝 辞

ブレスト&イメージングセンター設立にあたり、聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科 福田 護、聖マリアンナ医科大学放射線科 中島康雄両教授に多大なる御尽力をいただいたことに対し、ここに感謝の意を表します。